

大淵忍爾著

道教史の研究

窪 徳 忠

仏教とともに、古くから中国宗教史の大宗を形成してきた道教は、中国人のあいだに生まれ、その生活と密着しつづ展開したのだから、もつとも中国的な宗教といふことができる。従つて道教の研究は、中国学、ひろくいえば東洋学の、重要な一分野である。ところが現在までのところ、その性格や内容はほとんど明らかにされていないといつても過言ではない。たとえば、中国研究の専門家のなかにさえ、いまだに、道家と道教とを混同または同一視し、もしくは道教を淫猥なものときめこんでいる人があるという状態なのである。卒直にいつて、東洋史学界には道教やその研究を軽視する風潮がつよいように感ぜられる。かかる事態を惹起した原因は、専門家の問題意識や態度もさることながら、道教のもつ意義や価値を認めえなかつた明治以来の学界の風潮にあると思われる。

奈良・平安の古しえはしばらくおき、江戸時代には今日の一部の学者よりすぐれた知識をもつていた人々がいた。たとえば、金代以後に成立した道教の南北二宗や宋代の道蔵編纂について正しい理解を示した、塩尻の著者天野信景や、老子を道教の祖とする説の不当を指摘した本居宣長などがある。なお、江戸時代の民間の習俗や年

中行事の由来を道経の記載や道教説話に求めた人々もあれば、道教のとく養生術を實踐し、金丹道関係の道経を講じた人々もあつた。従つて、限られた範囲ではあつたにせよ、江戸時代には道教に対する認識や関心がかなり深かつたといえるであろう。かかる素地があつたのに拘らず、明治以後には、他の諸分野の研究が順調のびたのに反して、道教の研究だけはとり残され、わずか数名の先覚者諸氏の手で、学界の片隅で細々と行なわれるにすぎない状態となつてしまつた。儒仏二教の研究が、江戸時代の伝統をふまえて、なんの渋滞もなく進められたことから推して、中国社会でしめる道教の位置に関する認識の点で、当時の学者のあいだにやや欠けるところがあつた結果ではないかと考える。

研究の伸展をさまざまたいまひとつの理由は、複雑多岐な上に難解な道教の内容と、関係資料の量や性格とであつた。道教は中国古代の信仰や諸学説をはじめとする多くの要素の集合体だから、儒仏二教をふくめた、よほど多方面にわたる素養や知識がなければ、その内容を正しく把握して理解するのは困難である。

道教の根本資料は、いうまでもなく、道蔵所収の道教經典である。現在の通行本であるいわゆる上海版道蔵は、民国十二年（一九二三）から四年の歳月をかけて明の正統二蔵を影印したものであるが、日本にはわずか二十部ぐらいいしかきていない。そうして、上海版のなかつた明治から大正にかけてのころ日本にあつた道蔵といえは、宮内省図書寮（現宮内庁書陵部）所蔵の正蔵すなわち正統版一部のみだつた。だから当時は道蔵の使用がほとんど不可能で、道蔵

輯要や雲笈七籤を始めとする個々の道經によらざるをえなかつた。その結果、体系的な研究などは望むべくもなく、研究の伸展が阻まれたのも、無理のないことだったのである。上海版には、一四七六部、五四八五巻の道經を収める。こう膨大な量となると、一応通覽して整理するだけでも大変な時間と労力がかかる。まして、それら的大半が著作年代も撰者も不明というのだから、ことは一層面倒である。しかし、これらの点が明らかにならないかぎり資料としては使えないから、まず一々の道經の正しい著作年代の決定が要請される。

道藏本は善本だとく人がいるが、私のせまい経験からいつても、道藏本には改竄や錯簡がかなり目についたから、軽々に善本などということではできず、他の版本との比較が必要である。比較といえば、影印本と銘うつた上海版にも、ときに甚だしい誤刻もあるので、書陵部本やいわゆる敦煌本との対校が先決となる。ことに敦煌本との対照は、道經の著作年代決定の一基準ともなるわけだから、ぜひやらなければならない。道教研究の前段階ともいうべきこれらの点は、従来まつたくすてて省みられず、ようやく最近になつて、一部の学者によつて手がつけられたという有様である。

こんなわけで、道教の研究は中国学のもつとも遅れた分野のひとつとなつてしまつたのである。さる昭和二十五年に日本道教学会が創立されて以来、関係諸分野の専門家の緊密な協力によつて、組織的かつ体系的な研究がようやく活潑に行なわれるようになり、以前に比べれば格段の進歩をみたといふものの、まだまだ不十分な状

態である。そんな折に、古代道教の性格、道藏や道經成立の経緯などについて本格的解明のメスをいれた基礎的研究である本書をえたのだから、道教に関心をもつ人々にとつては無上の喜びであり、学界としてはこよなき収穫であつて、まことに慶賀にたえない。

自序によれば、著者が道教史の研究に志した原因は、研究が未開拓のまま放置されていたこと、および著者の先考大淵慧真教授の苦心になるコレクションの存在であつた。つとに道教研究の重要性に気づかれた教授は関係資料の蒐集に手をつくされ、わざわざパリに赴いてベリオ文書中の道教資料の大部分を撮影、入手された。その熱意と先見の明には、ただただ敬服のほかはない。その意をうけた著者は、すでに早く東大在学中から資料の探訪に努力し、ついに写真版ながらスタイン文書の関係部分すべてを入手した。これらの資料を縦横に駆使して本書所収の論考をものにしたのでから、本書はいわば父子二代による研究成果なのである。著者の前著「敦煌道經目錄」の上梓が教授の十三回忌の年であり、本年はその十七回忌に相当するという。まことに奇しき因縁であるとともに、地下の教授もさぞや満足の笑みをたたえておられることであろう。

成立期の道教に興味を感じた著者は、早くから太平道や抱朴子関係の詳論を発表し、近くは經典成立の問題におよんでいるが、そのうちからえらんだ十一篇に——ただし第三篇第五章は書下し——、さらに手を加えてまとめたのが本書である。従つて本書は、ひとつのテーマを集中的に追求したのではなく、内容は大きく三つに分けられている。

「中国における民族的宗教の成立」と題する第一篇は、社会史的観点からする、太平・五斗米両道の後漢末に成立した歴史的必然性の追求である。従来、両教団は仏教の影響で成立したとくのが支配的であつた。この点に疑問をもつた著者は、成立の要因を教団の側から主體的に考えるべく、まず仏教の影響といわれている義舎その他の規定や行為をとりあげ、それらが必ずしも仏教の影響とはいえない由を秦漢の諸文献によつて論証したのち、後漢の農村社会やその信仰内容を分析して、信徒の中核が流亡ないし流亡に瀕した窮乏農民らしい点から、従来の信仰対象であつた社のみでは人々の宗教的欲求をみたしえなくなる一方、農村の階級分化が進んで農民が孤独感に悩むようになったことを明らかにする。そうして、その悩みを救い、欲求や不満をみたすべく出現したのが両教団だつたと結論して、両教団が新宗教成立の基礎条件をそなえた地域、いいかえれば、崩壊過程にある農村地帯に成立したという新見解をたてる。

著者のもち味を遺憾なくしめすひろい視野、周到な用意、豊富な資料の活用、手堅い考察などもさることながら、従来何人も想到しなかつた右のような新見解は、とくに注目をひく。そもそも著者の根本的な研究態度は、教理や信仰などのせまい範囲だけからではなく、ひろく中国史全体の動きのなかで、できるかぎり総括的に道教を把握しようとするところにおかれてはいるが、そのような態度にしてはじめて提出しうる見解だからである。いいかえれば、著者の身につけている東洋史学の素養が、大きくものをいっているわけである。このような利点は、第二篇以下でも見事に結実している。

第二篇は抱朴子関係の論考で、その著者葛洪の年譜的伝記(第一章)、その思想や学問の系譜(第二章)、抱朴子にみえる神仙思想の性格(第三章)からなる。葛洪の人柄は、抱朴子の自序によつてよく知られているので省き、もつぱら当時の社会、文化、政治などの諸情勢との関係からその年譜的考察を行なつて、神仙思想家としての葛洪理解の前提とすべく試みたのが、第一章である。ひろく晋代の諸伝や抱朴子外篇などを参照して、先学の説を補訂しながら伝記をあとづけていく考究の仕方と手際とは、さすがに多年抱朴子研究に打ちこんだだけあつて、まことに重厚であり、著者にしてはじめて可能なところである。従つて、新見解が随所にひれきされ、私たちのみ方の狭少さをいまさらのごとく痛感させられる。なお、葛洪の岳父鮑靚の伝が章末に附され、晋書の葛洪伝にみえる鮑玄との関係、抱朴子が鮑靚にふれない理由などがのべられている。

ついで第二章において、葛洪がほぼ同じような生活条件におかれていた王充から思想的影響をうけたことを実証的に明らかにして、その学問的系譜の一端をたどるべく、論衡と抱朴子とくに外篇との原文をあげて、その表現形式および内容の二方面から、一々くわしく比較対照して異同を指摘したのち、さらに王符の潜夫論との類似点にも言及して、外篇がこの両者の影響によつて著わされたことは確実であり、この両者を無視しては抱朴子の思想を正當に理解することはできないと論断する。第三章に移つて、当時の神仙思想をしるための貴重な資料として著名な内篇の考察におよび、その内容を各方面から縦横に検討してふかい洞察を加えた結果、そこにとかれ

ている神仙思想は、単なる思想としての神仙説ではなく、仙術の理論であり、かつ葛洪がその仙術を金丹の作成を中心とする技術と考えていたことを明らかにする。そうして、このような考え方が内篇立論の根柢をなしているのだから、葛洪の神仙説の中核は、ふつういわれているような宗教的なものではなくして、むしろ非宗教的なものだという見解に到達している。この両章にみえる独自の見解は、著者にしてはじめて提出しようとするところであろう。

ところで従来は、道蔵の成立と道教教団の成立とは、まったく別個の問題のように考えられて各別に取扱われ、この両者を関連づけて全体的に把握しようとする試みは、たえて行なわれなかつた。ことに前者については、単に巻数の多寡のみによつてその概念を漠然と考え、成立を論ずるといふような、あまりにも無定見な説さえとかれていた。これは、もつぱら、概念が適確に規定されていなかつた欠陥によるものと考えられる。かかる有様にいたく不満を感じた著者は、両者はともに固定された概念ではなく、「勝れて歴史的な存在」と規定すべき性格のものだから、関連させて把握しなければならぬという立場をとる。そこで、以前から、経典もしくは道蔵の成立史をたどることによつて、道教の成立事情の一面を究明しようとしていたが、その考究の一端が「道教経典史の研究」と題する本書第三篇に収められた五篇の労作である。この第三篇は、本書の約六割の頁数をしめているから、著者としてはもつとも心血をそそいだ部分といつてもよいであろう。

右の立場から著者は、道蔵の成立を「道教者」の主観に「道教」

が統一的に意識されだした具体的な表明としてとらえようとする。著者のいわゆる「道蔵の成立」とは、具体的には、上清派の上清経を中心とする三洞の成立をさすが、三洞の格づけは仏教の三乗に対応するものだから、当然仏教の影響が予測されるし、従来は道蔵の成立自体も仏教の影響ととかれてきた。この点に疑いをいだいた著者は、仏教側の事情を参考にしながら三洞の成立にくだしい考察を加えて、仏教の三蔵に対応するものでないと推定する。そして、洞神・洞玄・洞真にわかれている三洞は、それぞれ別個の成立事情をもつものであるのにかかわらず、それを「三洞」としてまとめた点に「道教者の統一意識」のあらわれを認める。そのような三洞に、内容的には三洞より古い成立とみられる四輔を加え、いいかえれば範圍が拡大されて、ここに道蔵が成立するのであるが、それがすなわち道教の成立だと考える。これが第一章の概略の主旨であるが、章末に、三洞説をときだしたのを陸修静とみる従来の説を批判し、陸修静の伝に検討を加えて、三洞説の始唱をかれ以前とする一文が附されている。

第一章に示めされたような考えを具体的な例について示めしたのが、第二章以下の論考である。第二章は、抱朴子に初見する三皇文を手がかりとして、それが洞神經となる経過をたどり、道蔵の成立過程を示めす一例とするものであるが、三皇文に二種あるとみる従来の説を、東洋史学の素養によつてきわめて綿密に考証して批判を加え、一種と結論する重厚な手法には、敬服のほかはない。その結論を妥当と考えるのは、私があながち東洋史出身のためばかりでは

あるまい。第三章は、老子道德経序訣の考察で、まず敦煌本を底本として唐宋時代の諸書にみえる文と対校し、内容を五段にわけて、武内義雄、福井康順両博士の説を批判しつつ、その各段の成立の順序と事情とを明らかにしているが、その作者は葛洪ではなく、道德経派とでもいふべき派に属する人ではないかという推定は、古代の道教諸派を考える上から注目をひく。

第四章では、十卷本洞淵神呪経（現行本は二十卷本だが、十一巻以後は後世の追加）を、第三章と同じく敦煌本をもとにしてくわしく対校し、本文中にみえる三洞あるいは三洞経なる語を目安として全体を新古の三つの段階に次第する。そうして、最古の部分は東晋末、もつとも新しい部分は六朝末のころ、それぞれ江南において成立したと結論する。敦煌本という資料の紹介も意義のあることながら、片言隻語もゆるがせにしない厳密な考証と慎重にして丹念な態度とは、よむものをして襟を正させるような感じさえうける。第五章は、両晋南北朝における「一種のメシヤ説」もしくはその運動である真君李弘のといたとされている李家道に重点をおいて、洞淵神呪経の内容と性格を論じ、現世利益を眼目とするこの經典は、南朝では正規の道経と認められなかつたので、正規の道経としての地位をえるために、のちに三洞と結びつく傾向をもつようになった。そうして、仙にはほとんど言及せず、他の道経同様、仏教の影響をうけているが、その影響は単に表面的であり、これは仏教受容の一事例だとのべている。

さきもののべたように、本書はひとつのテーマを集中的に追求し

たものではないから、本書を通ずる結論はない。

以上が、著者の意図とねらいとを中心とした、本書のごく概略の紹介である。全般的にいって本書は、先人の研究をふまえて、もしくは批判を加えながらその上になつて、従来とられなかつた立場からするきわめて綿密な基礎的労作ということができるであろう。このようなまづたく基礎的な研究は、冒頭にのべたような理由から、従来はのぞむべくもなかつた。それが行なわれたにしても、結局はせまい視野にならざるをえず、ひろい立場からする総括的な把握という点では欠けるところが多いものにしかならなかつたのは、当然のことであつた。従つて、道教の研究を一段とたかめるためには、いつかは行なわなければならないことだつたのである。たまたま、まことに当をえた著者によつて、この困難な仕事が行なわれた。いわば、本書によつてはじめて、漢代から六朝にかけての道教の性格の一端がほぼ明らかにされたのであつて、たとえていえば、千古斧鉞をいれることのなかつた道教というジャングルに、はじめて斧がいれたらつたといつてもよいであらう。ながらく、ともにこのジャングルに斧をいれようと努力していた私にとつても、こんな喜ばしいことはないのである。

とはいふものの、本書の説によつて、唐代以前の道教や道経に関する諸問題が、一挙に解決されたといふことはできない。著者も、序文で告白しているように、すべて未完の論考であり、残された問題もかなり多い。その上、専門の時代を異にする私の目からみても、納得のいかない点がかなりある。つぎに、それらの点を、ごく

簡単に指摘しておく。

第一篇において、太平・五斗米両道の歴史的必然性を追求するといいながら、筆はもつぱら太平道に傾いて、五斗米道にほとんどふれていないのは、片手落の感があるとともに、その所説が読者を納得させないうらみがある。もちろん、本書は専門家を目標としてものされたのであろうから、先刻承知のこととして省いたのかもしれないけれども、やはり、まず一応両者の概貌を紹介すべきであつたであらう。著者はすでに、それらについて発表しているのであるから、なおさらのことである。また著者は、階級分化のはげしい地域に道教が発生したというすぐれた見解を示めしながら、その際立論の根拠として使用されたのは、もつぱら太平道であつて、五斗米道にはふれていない。たしかに太平道の場合は、著者のいうごとくであらう。しかし、五斗米道の場合はどうであつたらうか。当時の四川地方が果して著者のいうように、階級分化がはげしかつたであらうか。この点を明示しなければ、読者は著者の右のような見解には納得しないであらう。著者が、社会経済面を重視するのは結構である。しかし、その反面、精神文化、神秘的風潮の面においては、やや欠けるところがあるように感ぜられる。さらに、この場合には、神仙的仏教の受容や展開についても、考慮をはらう必要があるように思われる。これらを総合してはじめて、両道発生当時の社会の実態が明らかにされ、著者の意図が達せられるのではなからうか。

第二篇において、政治、社会、文化の諸事情との関係から、葛洪の年譜的な伝記や学問の系譜を追求するのは結構である。しかし、

そうはいいながら、政治との関係に重点がおかれていて、後二者において粗である。また、私たちとしては、抱朴子内篇をのべるにいたつた、葛洪の思想形成の過程が知りたいわけである。それにも拘らず、著者がこの点にふれないのは、はなはだ残念である。神仙思想家としての葛洪を理解する前提として、その伝をのべたと、著者はいう。それならば、当然この点に重点をおく必要があるのではなからうか。もつとも、これは著者がつぎの研究として残してあるのかも知れない。もしそうだとすれば、一言さいごに附加すべきであつたであらう。また附章において、鮑靓伝を究明しているが、それならば、葛洪に関係のふかかつた鄭隱についてもふれるべきであらう。鮑靓のみでは中途半端の感がふかい。鄭隱の伝は、ほとんどわからないのが実状である。もし著者が、明らかにすべく努力しても不明であつたならば、その旨を一言すべきであらう。この両者との関係が明らかになれば、いわゆる葛氏道が、果して葛氏道とよんでよいかがどうかが一応見当がつくからである。なお、抱朴子の内外両篇の統一も残された問題となる。

第三篇については、私の能力外のことなので論評をさしひかえるが、私のようなものからみても、いささか独断のように思われる点がないではない。李家道を「一種のメシヤ思想」というのは、その一例である。なお、第二篇で申しおとしたが、葛洪の仙説をもつて、非宗教的と断ずることは、いかがであらうか。宗教に関する定義として、宗教とは、人間生活の究極的な意味をあきらかにし、人間の問題の究極的な解決にかかわりをもつと、人々によつて信じら

れているいとなみを中心とした文化現象だという、故岸本英夫博士の説があるからである。著者の再考をのぞみたい。

文章については、あまりにも慎重な考察態度のために、明快さをかき、そのために理解に苦しむところが多い。また、紙数の関係からか、主語をはずき、説明を簡略にしているためによくわからない箇所もかなり目につく。また、議論が中途半端で終る場合が少なくない。おそらく慎重な態度のしからしめた結果であろうが、資料に即していえることだけをいい、そのあとは不明として考察をやめてしまったために、読者は途中で突放されて、とまどつてしまう。ある程度の推論や臆測はのべた方がよかつたのではなからうか。それは、つぎの研究の緒口になると思われるためである。また、ちむをえないうことではあるが、論旨があまりにも多岐にわたりにすぎている場合があり、読者が苦しめられる。この点、いま一工夫がのぞまれる。誤植はかなり多い。この方面にも慎重な態度がほしかつたが、再版の折にはぜひ綿密に訂正をしてほしいものである。索引は粗にすぎよう。

以上、いさゝか筋ちがいの点までふくめて、勝手な妄評をのべたが、同じ道をおゆむものとしての望蜀の言として、著者の寛恕をこいたたい。いずれにしても本書は、最近の道教学界、ひろくいえば中国学界のはなはだ大きな収穫であつて、専門家のみならず、ひろく中国に関心をもつ方々の一読を切望する次第である。(昭和三十九年三月刊、岡山大学共済会書籍部、二二〇〇円)

(昭和三九・八・三一稿)

ヴィクター・パーセル著

「義和団の蜂起——その背景の一研究」

村松祐次

(1)

古くはハート (Robert Hart)、『モース (H. B. Morse)』、『デ・グロート (De Groot)』、『デュヴンダク (J. J. L. Duyvendak)』、『ウイール (Putnam Weale)』、『スミス (Arthur Smith)』などから一九一〇—二〇年代のクレメンツ (Paul Clements) やスタイガー (Nye Steiger) を経て、最近の譚春霖 (Chester Tan: The Boxer catastrophe, N. Y. 1955)、『陳吉義 (Jerome Chen: The nature and characteristics of the Boxer movement—a morphological study, BSOAS, XXIII, 2)』、『ヤンクマン (G. G. H. Dunstheimer: Religion et magie dans le mouvement des Boxeurs d'après les textes chinois, T'oung pao XLVII, 1961)』、『フランク (Peter Fleming: The siege at Peking, 1959)』などに到る。義和団に関する西洋語文獻は真に汗牛充棟と言つてもよい。長らく英領南洋地方に現地官吏として勤務 (Malayan Civil Service, 1921-1946) の南洋華僑に関する大小二冊の本 (V. Purcell: The Chinese in South East Asia, London, 1952. Ibidem: The Chinese in modern Malaya, Singapore, 1960) を書き、現にケンブリッジ大学で東洋史